後鳥羽院における定家摂取

――『正治初度百首』をめぐって――

瀧倉朋世

はじめに

勅撰集の語句を摂取して新たに一首を詠むことは、鎌倉時代非常に盛んであった。また、定家詠を倣って和歌を詠む歌人もいた。鎌倉時代における代表的な歌人の一人である後鳥羽院（以下、後鳥羽院のことを「院」と称する）が、晩年、隠岐で書いたとされている『後鳥羽院御口伝』の中で、当代の代表的な歌人である定家をとりあげ、定家を倣って詠歌することについての危機感を、

すべてかの卿が歌の姿、殊勝の物なれども、人のまねぶべきものにはあらず。心あるやうなるをば庶幾せず、たゞ詞姿の艶にやさしきを本体とするあひだ、その骨すぐれざらん初心の者まねばゞ、正体なき事になりぬべし。

（『歌論歌学集成　第七巻』による）

と述べている。院の記録に残っている最初の詠歌は「正治二年七月北面御歌合」「同七月十八日御歌合」「同八月一日新宮歌合」で、その後、初の百首である『正治初度百首』を詠んでいる。『後鳥羽院御口伝』には百首の重要性について

25・文学研究科／瀧倉朋世【縦組】.smd Page 1

記載がある。[1] これまで『正治初度百首』（以下「初度百首」と略称する）については、様々な研究がなされてきた。中でも院の百首には、詠進者すべての百首が記載されている『正治二年院御百首』中の百首（以下、「編纂本」とする）と、家集である『後鳥羽院御集』中の百首（以下、「御集本」とする）とでは和歌の相違がみられる。編纂本と御集本においてどちらが先かについては、山崎桂子氏のご論考で、御集本が後と決着がついた。和歌の相違については、編纂本が後とし、有吉保氏、寺島恒世氏、萬田康子氏が論じられ、御集本が後とし、久保田淳氏、山崎氏、再度、寺島氏が述べられている。編纂本になく、御集本にみえる和歌を院の改作とし、久保田氏、山崎氏、寺島氏、樋口芳麻呂氏が述べられているが、詳細は四章にてふれる。中でも、院が定家詠をどのように倣って、「正体なき事にならぬ」よう、[2] 詠歌しているかについて興味深い。

本稿では、院の詠歌活動における初度百首に注目して当代歌人詠、定家の影響を検証する。まず、一、古今集を摂取する詠、二、その他の先行勅撰集から摂取した例、三、初度百首における定家詠摂取、四、初度百首における改作、五、当代歌人の影響、といった各章において、実作に即して検討しながら、それらについて考えてみたい。

一　古今集を摂取する詠

初度百首は『新古今集』編纂のための資料となった院の初の百首であるが、俊成の申し出により、定家と家隆らが加えられた。定家は、八月二十五日詠進（数首訂正し、後日提出）し、これを契機に院により評価され、後鳥羽院歌壇の一員となる。一方、定家も院を評価している。『明月記』（正治二年十一月二十二日条）に本百首の院の詠歌を「御製真

実に殊勝」と評している。初度百首については、久保田淳氏・中村文氏・渡邉裕美子氏・家永香織氏・木下華子氏・高柳祐子氏『正治二年院初度百首』（和歌文学大系四九・明治書院、二〇一六年）を参考にした。

院の初度百首の内、『古今集』を摂取した作（本稿では『古今集』の和歌を本歌取りにした作、もしくは表現を参考にして詠んでいる作を称す）と考えられる和歌は十二首ある。[3] 次にあげる。（和歌の引用は、新編国歌大観による。傍線を私に付す。漢数字は歌番号）。なお傍線部分は、それぞれ『古今集』入集歌（歌は省略した）によっていると考えられる表現。

春二十首

a 春雨に野べのかげろふ見えわかずくれゆく空のたどたどしさに（一一）
　さくら花ちりのまがひに日はくれぬ家路もとほししがの山ごえ（一五）

夏十五首

b 夜もすがら宿のこずゑに郭公まだしきほどのこゑを待つかな（一三）

c なにとなく過ぎゆく夏のをしきかな花を見すてし春ならねども（三四）

秋二十首

竹の葉を吹きうらがへすあき風に露の玉ちるゆふぐれの空（三七）
おほかたの秋のなさけの荻のはにいかにせよとて風なびくらん（四一）
うす霧のあかしの浦ははれやらでさだかに見えずおきのつり舟（四三）
たち花のこじまがさきの月影をながめやわたす宇治の橋守（四六）

25・文学研究科／瀧倉朋世【縦組】.smd Page 2

冬十五首

竹の葉はおぼろ月夜に風寒（さ）えてむらむらこほる庭のおもかげ（六二）

恋十首

月夜にはこぬ人待つといとひてもくもるさへこそねられざりけれ（七五）

いにしへにたちかへりけん心さへおもひしらるるまつよひの空（七九）

住よしのきしにおふなりたづね見んつれなき人を恋わすれ草（八二）

十二首のうち、定家の表現もふまえた和歌、a、b、c歌について検討する。

a歌は次の和歌、

題しらず　　よみ人しらず

かげろふのそれかあらぬか春雨のふる日となればそでぞぬれぬる（『古今集』巻十四・恋歌四・七三二）

より「かげろふ」「春雨」と詞を取り、詠んでいる。「かげろふ」を、古今和歌では、「陽炎のようにあの人なのかそうでないのかはっきりとわからないくらい」と、「陽炎」と詠み、院は「春雨に野辺の蜉蝣がはっきり見分けられない」と、虫の「蜉蝣」に詠んでいる。それは後にあげる定家詠をふまえている。古今和歌は、「春雨が降る日のように涙で濡れている」と春雨を涙に見立てている。また、「くれゆく空」「たどたどし」は次の和歌を参考にし、詠んだかと考えられる。「くれゆく空」は『万葉集』では「夕闇」、『源氏物語』では「たそがれどき」となっている。主題は「月」を「春雨」にしているが、本歌と考える。

豊前国娘子大宅女歌一首　未レ審二姓氏一

夕闇者（ユフヤミハ）路多豆多頭四（ミチタツタツシ）待月而（ツキマチテ）行吾背子（ユカムワカセコ）其間尓母将見（ソノマニモミム）

（『万葉集』巻第四・相聞・七〇九）

なかなかに折りやまどはむ藤の花たそかれどきのたどたどしくは

（『源氏物語』[4] 藤裏葉・夕霧）

またa歌は次の和歌、

虫十

わきかぬる夢の契ににたるかな夕の空にまがふかげろふ（建久二（一一九一）年十題百首）（拾遺愚草上・七七六）

より「かげろふ」を取り、「夕の空」を院は「くれゆく空」としたとも考えられる。「わきかぬる」は、定家詠が初で、「夢の契り」と合わせて、蜉蝣の儚さを「現実のことと区別しがたい」とし、院は「わかず」とし「見分けられない」と詠み、似ている。定家詠以後、『千五百番歌合』で讃岐が次の和歌

八百七十八番　左　　讃岐

みなと河なみのまくらにわきかぬるしづくはとまのしぐれにぞしる（一七五四）

と詠んでいる。

また、「くれゆく空」の先行例には次の和歌、

さいさう

なけつつくれゆくそらのゆふべこそあはれのそらをながめられけれ（『大斎院前の御集』三一二）

が早く、数件みえる。

b歌の歌意は「私の家の梢で時鳥が時節に先駆けて声を聞かせてくれるのを夜通し待つことだ」で、

題しらず　　伊勢

25・文学研究科／瀧倉朋世【縦組】.smd Page 4

五月こばなきもふりなむ郭公まだしきほどのこゑをきかばや（『古今集』巻三・夏歌・一三八）

より「郭公」「まだしきほどの」「こゑ」を取り、「こゑをきかばや」を「こゑを待つかな」と、時鳥の声を待ち遠しく思いながらいる様子を共通に詠んでいて、本歌と考えられる。

またb歌は次の和歌、

五月

人家の雲まに郭公ある所

いく里の人にまたれて郭公やどの梢に声ならすらん（文治六（一一九〇）年女御入内御屏風歌）

（拾遺愚草中・一八九一）

よりも「郭公」「やどの梢に」「声」と詞をとり詠んでいる。古今和歌では、郭公の声を聞きたいものだと、一般的に述べているが、定家詠も院の詠歌も自分の家で、と詠んでいる。定家詠の「私の家の梢で鳴いている」を院は「私の家の梢に来るのを待っている」と詠みかえている。「鳥」「宿の梢」の組み合わせの先行例は、

恋二十首

こひしなば鳥ともなりて君がすむ宿の梢にねぐらさだめむ（久安百首・七九）

がみえる。

c歌の歌意は「花を見捨てた春ではないのだけれども、過ぎゆく夏は何とはなしに惜しく思われる」という夏を惜しむ主題の作で、次の和歌、

帰雁をよめる　伊勢

はるがすみたつを見すててゆくかりは花なきさとにすみやならへる（『古今集』巻一・春歌上・三一）

より「はる」「見すて」を取り詠んでいる。古今和歌は、「春霞が立つのにそれを見捨てていく雁は、花のない里に住みなれているのだろうか」という歌意で、花のないところにいるという雁を、花を見捨てた自らに置き換え院は詠んでいる。

またc歌は古今和歌の疑問（「春霞を見捨てていく雁は花のない里に住みなれているのだろうか」）への一つの回答を掲示したと考えられる次の和歌、

春廿首

まだきより花を見すてて行く雁や帰りて春のとまりをばしる

（文治二（一一八六）年・二見浦百首・拾遺愚草上・一一七）

が定家詠にみえる。院は、定家詠の「春のとまり」、春の行き着く先、春の終わりを、夏を惜しむ歌と季節をすすめ、よみかえたか。院は古今和歌の表現を摂取しながら、定家詠も意識し、詠んだと考えられる。

院は、初度百首の時から、古今和歌をふまえて詠歌していて、『古今集』を心得ていたことがわかる。百首中、十二首、古今和歌を参考にしたことや、古今和歌のうち六首が、「よみ人しらず」と詠歌時期が古い和歌からで、定家の本歌取りの手法と共通している点がみられる。

25・文学研究科／瀧倉朋世【縦組】.smd Page 6

二　その他の先行勅撰集から摂取した例

院の初度百首の内、その他の勅撰集から摂取した作は十八首ある。そのうち、定家の表現もふまえた和歌四首、d、e、f、g歌について検討する。

夏十五首

d夏草の草の葉がくれゆくほたるさはべの水に秋もとほからず（三三）

冬十五首

eさらに又うすき衣に風さえて夏をやこふるをののすみやき（六四）

恋十首

f月夜にはこぬ人待つといとひてもくもるさへこそねられざりけれ（七五）

山家五首

gなぐさめにけぶりばかりはたえねどもさびしきものを冬のすみかは（九三）

d歌は『伊勢物語』四五段にもみえる次の和歌、

題しらず　　業平朝臣

ゆく蛍雲のうへまでいぬべくは秋風ふくと雁につげこせ（『後撰集』巻五・秋上・二五二）

秋を待つ思いを雁を待つ形で表した歌を本歌とし、「ゆく蛍」「秋」を取り詠んでいる。この和歌は、物語中で、思いを

告げてすぐ亡くなった女性を思いながら、主人公である男が、六月終わり、夜が更けて、少し涼しい風が吹き、蛍が高く飛び上がる様子を臥したままみて詠んだ和歌である。また院は、次の定家詠、

ちかしとも秋のけしきのみゆるかなみだるるほたる山のはのほし（『拾遺愚草員外』・夏・三三）

より、「ちかしとも」を「とほからず」としている。院の詠歌のあとに定家は次の歌、

すまのうらもしほの枕とふ蛍かりねの夢ぢわぶとつげこせ（『拾遺愚草』夏・海辺見蛍・二二二七）

を詠んでいる。また、同じ後撰和歌を本歌にして次のように詠んでいる。

へだつらんいくへの雲のほかにして秋風ふくと雁の聞くらん（『拾遺愚草員外』秋・三九）

e歌は次の和歌、

三百六十首の中に　　曾禰好忠

み山木をあさなゆふなにこりつめてさむさをこふるをののすみやき（『拾遺集』巻一七・雑秋・一一四四）

を本歌とし、「をののすみやき」を取り、「さむさをこふる」を「夏をやこふる」とし、詠んでいる。また、院は次の定家詠、

すみがまや小野の里人あさゆふは山路をやくとゆき還りつつ（『拾遺愚草』冬・一六六二）

すみがまのやくとつま木をこりつめて煙にむせぶをののさと人（『拾遺愚草員外』冬十五首・七三八）

をふまえ詠んでいる。院は定家詠が「小野の里人」を対象にしているところより「うすき衣」と人が着ている衣に注目したか。院の詠歌の後、再度定家は拾遺和歌を参考に次の和歌

身をしをるすみのやすきをうれへにて氷をいそぐあさの衣で（『拾遺愚草』冬十五首・一三六五）

25・文学研究科／瀧倉朋世【縦組】.smd Page 8

を詠んだ。定家は、院の詠歌の「うすき衣」を「あさの衣」とし詠んでいる。

f歌は次の和歌、

題しらず　　よみ人しらず

いつしかとくれをまつまのおほぞらはくもるさへこそうれしかりけれ（『拾遺集』巻一二・恋二・七二二）

を本歌に、詠んでいる。「まつ」「くもる」をとり、「うれしかりけれ」を「ねられざりけれ」と、暮れを待つ主題を月夜によみかえている。院は次の定家詠を参考にしている。

しののめは月もかはらぬ別にてくもらば暮のたのみなきかな（『拾遺愚草』月五十首・六七六）

本歌では、うれしく思われるのが「暮」の時とし、定家の六七六歌では、月と恋人は共にしののめの時分が別れで、「暮」には会えるとあてにするが、空がくもり、月が見えないと会うこともあてにできないと詠む。院は、やって来ない人を待ってしまう月夜を嫌っても、くもっている夜までも期待して寝られないと、詠んでいる。定家には次のような詠もある。

あら玉の年のくれまつおほ空はくもるばかりのなぐさめもなし

（『拾遺愚草』恋・正治元年冬左大臣家冬十首歌合、契歳暮恋・二五七一）

g歌は次の和歌、

題不知　　和泉式部

さびしさにけぶりをだにもたたじとてしばをりくぶるふゆの山ざと（『後拾遺集』巻六・冬・三九〇）

を本歌としふまえながら、冬の山里の趣向を詠んでいる。また、次の定家詠、

けぶりさへめにたつけさのすまひかな梢あらはにはるる山里（『拾遺愚草員外』詠四十七首和歌・冬十首・二三二）

をふまえ、山家の様子を院は詠んでいる。

以上、その他の勅撰集から摂取した詠歌を検討した結果、それぞれの和歌において、定家詠を巧みに吸収して詠んでいることが特徴として指摘できる。

三　初度百首における定家詠摂取

院は、初度百首で定家取り（院が詠んだ和歌の内、定家の和歌を参考にしたり、詞を取って詠んでいることを本稿ではこう称す）した和歌は、一、二章にあげた以外に五首あり[5]、次にあげる。

春二十首

h吹きまよふよしのの山の春風はにほひをそふる雪気なりけり（一三）

秋二十首

i月影をなみ路はるかにながむればあまのとまやは山のはもなし（四七）

jきりぎりすうらむるこゑも庭の荻のすゑこす風も秋ふけにけり（五二）

冬十五首

kあきくるるかねのひびきはすが原や伏見の里の冬のあかつき（五七）

羈旅五首

25・文学研究科／瀧倉朋世【縦組】.smd Page 10

l これまでも旅のね覚はあはれなりしづがをがみもこころごころに（八四）

詳細を検討する。

h歌は、初度百首の頃の院と同じ年齢の頃に定家が詠んだ『初学百首』[6]の次の和歌、

春廿首

みなかみに花やちるらんよしの山にほひをそふる滝の白いと（初学百首・一八）（拾遺愚草一八）

より「よしの山」「にほひをそふる」の詞を取り、「滝の白糸が白く美しい」を「春風に舞う雪が白く輝いている」と詠みかえている。院は散る桜の花びらの様子を雲げの風に見立てて詠み、定家は、水上で散った花びらがまじり、泡立つ滝を詠んでいる。[7]

「にほひをそふ」を詠んでいる例は

閑院右衛門督実成

にほふよりにほひをそふるみなそこにすみてぞかほるしらぎくの花（万寿元（一〇二四）年高陽院行幸和歌・八）

がみえ、そのあと次の和歌

毎春花芳といへるこころをよめる　源仲正

春をへてにほひをそふる山ざくら花はおいこそさかりなりけれ（千載集・春歌上・七一）

保元四年の春内裏の御会に、花有喜色といふことをよませたまひしに

九重ににほひをそふる桜花いく千世春にあはんとすらん（長秋詠藻（俊成）中・二一〇）

などがみえるが、吉野山の桜に使った例ではないので、定家詠の影響が大きい。

i歌は次の和歌、

眺望二首

わたのはら浪と空とはひとつにている日をうくる山のはもなし（建久九（一一九八）年　仁和寺宮五十首）（拾遺愚草・一七七八）

より「なみ」「山のはもなし」を取って詠んでいる。定家詠の大海の眺望を詠み、「入日を受け止める山の端もない」とあるのを院は「月を眺めると、苫屋からは山の端も見えない」と詠みかえている。

院と同じく初度百首に「山の端もなし」を詠んだ和歌、

夏

麓までひとつ雲路となりはててやまの端もなし五月雨の空（正治初度百首・一四三二）

がみえる。この歌は梅雨空を詠んでいるが、「雲路と」云々とあり、院はこの家隆詠もふまえているかと思われる。

j歌は次の和歌、

秋

いくかへりなれてもかなし荻原やすゑこす風の秋のゆふぐれ（正治初度百首・定家・一三四二）

より「荻」「すゑこす風」「秋」を取って詠んでいる。一日の終わり「秋のゆふぐれ」を季節の終わりの意として「秋ふけにけり」としている。「荻の葉末を風が吹きこして行く秋の夕暮れ」を、「萩の末葉を吹きこす風も、秋が更けたのだなあと感じさせる」に詠みかえている。

k歌は次の和歌、

春十五首

霞とも花ともわかずすがはらやふしみの里の春の明ぼの（文治三（一一八七）年皇后宮大輔百首）
（拾遺愚草上・二一〇）

より「すがはらやふしみの里」を取り、「春の明ぼの」を「冬のあかつき」と詠みかえ、春の花の歌を初冬を告げる鐘の歌に詠みかえている。

1歌は次の和歌、

春卅

これまでも心心はわかれけりなはしろ水もおのがひきひき（建久元（一一九〇）年一句百首・一一四）
（拾遺愚草員外雑歌・一一四）

より「これまでも」「心心」を取って詠んでいる。定家詠の歌意は「これまでも人々の心は別れ別れだったのだ。だから苗代の水にしても、めいめい自分の田に引き入れるのだ」と、結句と対にして表現している。

「心心」を取って和歌を詠んでいる例は

右

なつむしのわがたましひにみをかへてこころごころにこがれけるかな
（陽成院歌合（延喜十二（九一二）年夏・詠者名不明）二〇）

恋　雑　并百六十首

みな人はこころごころにあるものをおしひたすらにぬるるそでかな（新撰和歌・巻四・二二七）

などから始まり、勅撰集入集歌では次の和歌、

むし

なく虫のひとつこゑにも聞えぬは心心に物やかなしき（和泉式部集・一三六）

が『詞花集』一二〇にみえる。また院と同じく初度百首で家隆も、

秋　上総介藤原家隆上

いろいろの千種の露やなく虫のこころごころのなみだなるらん（初度百首・一四四三）

を詠んでいる。しかし、「これまでも」と組み合わせる例はないので定家詠をふまえているかと思われる。

四　初度百首における改作

院の初度百首は、編纂本と、御集本（『後鳥羽院御集』については、寺島恒世氏『後鳥羽院御集』（和歌文学大系二四・明治書院、一九九七年）を参考にした。）とで異同、改作、除棄歌があり、和歌の入れ替えがある。そのことについては、有吉保氏[8]、久保田淳氏[9]、寺島恒世氏[10]、萬田康子氏[11]、山崎桂子氏[12]のご論考がある。とくに改作の先後をめぐって論争があったが、山崎桂子氏が編纂本で重出している和歌を検討し、御集本が改めていると論じ、編纂本から御集本へ改作されたとの見方で決着した[13]。改作については、山崎桂子氏は、前掲本「第三章成立（二）第一節　後鳥羽院の改作七章　当代歌人からの影響と改作の時期」で「院が定家から強い影響を受けていることは確かであるが、問題となるのは同じ『正治初度百首』の定家詠からの影響である」と述べられ、久保田淳氏も指摘されている御集本一〇と初度百首

25・文学研究科／瀧倉朋世【縦組】.smd Page 14

一三三七、御集本一五と初度百首一三一八、御集本二九と初度百首一三三〇についての類似が認められるといった内容が述べられている。樋口芳麻呂氏は、前掲本[1]「第二章　詠歌精進の時代」で、山崎氏と同じ和歌を取り上げ、「『新古今和歌集』における歌の差し替えと同じことが、院の歌集には見いだされるのである。また、このときの詠出歌人の内、定家の歌を高く評価したことはすでに述べたところだが、院の歌の改作の契機にもなっているとみられるのである」と述べられている。寺島恒世氏は、前掲本[2]「第一章　百首歌の主催　第一節　正治両度百首」で山崎氏と同じ和歌を取り上げ、「いずれも定家・式子内親王の百首歌を読み味わったことを前提とした歌いぶりであり、改作の契機に、彼らの歌に触れた院の感銘を認めることができそうである」と述べ、御二一歌は、編二一歌「花になれし」が経家の「心さへ」（編一〇二四）を介して得られた。御三一歌は良経の「明がたの」（編四五九）をふまえたといった内容を述べられている。編纂本になく御集本にのみ見える和歌は九首[14]あり、そのうち次の五首が同じ初度百首内で改作が行われている。そのうち、m、n、o歌は、定家の影響により改作[15]されたと考えられる。先行研究を再確認の形となるが、以下に検討を加える。

春二十首

m花か雪かとへどしら玉いはねふみ夕ゐる雲にかへる山人（御一〇）

n風は吹けどしづかにほへをとめ子が袖ふる山に花のちるころ（御一五）

夏十五首

o軒ちかくしばしかたらへ時鳥雲よく夜ひのむらさめの空（御二九）

p夏くれば心さへにやかはるらむ花にうらみし風もまたれて（御二一）

qうたたねの夢ぢのすゑは夏のあした残るともなきかやり火の跡（御三一）

m歌は初度百首における定家詠、

夏

夏か秋かとへどしら玉いはねよりはなれておつる滝がはのみづ（正治二年八月御百首　一三三七）

からの影響が考えられる。歌意は「秋かと思われる涼しさに今は夏なのか秋なのか尋ねるけれど、そんなことは知らず問いには答えないで、白玉のような水しぶきをあげて岩の根元から落ちる滝川の水よ」で、その定家の上句「夏か秋かとへどしら玉いはね」を、「花か雪かとへどしら玉いはね」とし、山にかかる雲が花か雪かと問いかける。これは、同じ初度百首における式子内親王詠

春

かすみゐるたかまの山のしら雲は花かあらぬかかへるたび人（正治二年八月御百首・二一七）

を踏まえた表現でもあろう。式子内親王歌の下句を分けて配し、「旅人」を「山人」に詠みかえ、定家歌によったと考えられる。

n歌は次の人麿の和歌を本歌として考えられる。

柿本朝臣人麿歌三首

未通女等之（ヲトメラガ）　袖振山乃（ソデフルヤマノ）　水垣之（ミヅカキノ）　久時従（ヒサシキヨリ）　憶寸吾者（オモヒキワレハ）

（『万葉集』巻四・相聞・五〇一[16]）

題しらず　柿本人麿

後鳥羽院における定家摂取　一七

をとめごが袖ふる山のみづがきのひさしきよより思ひそめてき（『拾遺集』・巻十九・雑恋・一二一〇）

また同じく人麿歌を本歌とする定家の初度百首の詠歌、

春

花の色をそれかとぞおもふをとめ子が袖ふる山の春のあけぼの（正治二年八月御百首　一三一八）

を踏まえている。「をとめごが袖ふる山」を定家歌と同じ位置に配し、あたり一面の落花の景色を詠む。差し替え[17]の対象となった歌は、

春二十首

ちる花を吹きくるままにこの春は風ぞうれしきみよしのの里（正治二年八月御百首・編纂本・一六）

である。差しかえることによって定家詠への強い意識がよみとれる。

o歌は次の定家の初度百首の詠、

夏

郭公しばしやすらへすが原や伏見の里のむら雨のそら（正治二年八月御百首　一三三〇）

を踏まえた歌、歌意は「時鳥よ、しばらくとどまっておくれ。菅原の伏見の里はお前が鳴くのにぴったりの村雨の空だ」である。「しばしやすらへ」の呼びかけを、「しばしかたらへ」とし、雨の降り出した宵、雨宿りを勧め、時鳥の声を身近に聞こうとする。これら三首は、いずれも定家の百首和歌を院が読み味わった結果の改作と考えられる。[18]

一三三〇歌は、院にとって印象深かったのか、初度百首の後にも次のように、

古寺郭公

名にしおはばしばしやすらへ時鳥たちばなでらの夏の夕ぐれ（正治二（一二〇〇）年新宮歌合・御集一五〇四）

暁山郭公

ほととぎす声ははつかの山のはの有明の月にしばしやすらへ

（正治三（一二〇一）年同四月卅日影供歌合　御集一五三六）

詠んでいる。定家歌より、共に「郭公」「しばしやすらへ」の詞を取り、「すが原や伏見の里」を御集一五〇四歌では「たちばなでら」としている。また、「むら雨のそら」を御集一五〇四歌では「夏の夕ぐれ」とし、御集一五三六歌では、「はつかの山のはの有明の月」と詠みかえている。

五　当代歌人の影響

編纂本内で、参考にして院が詠んだ和歌は一四首で、参考歌の部立ては、一首を除くと同部立ての他の歌人であった。また、次の百首である、『正治二年院第二度百首』（以下、『正治二年院第二度百首』を「後度百首」と略称する）で初度百首の和歌を参考に院は一〇首詠んでいる。改作時の和歌は九首中五首、後度百首詠は全て、参考歌とは別の部立てから摂取している。後度百首を詠む際に初度百首の当代歌人詠を参考にしているのは、院にとって初度百首が特別であることを意味するのではないか。当代歌人詠による影響が大きかった。その例を次に一覧する。

Ⅰ　初度百首（編纂本）内における当代歌人詠をふまえたと考えられる院詠歌

Aながむれば雲路につづくかすみかな雪げの空の春の明ぼの（春二十首・編七）

25・文学研究科／瀧倉朋世【縦組】.smd Page 18

Bうの花のかげなかりせばほととぎす空にやけふの初音きかまし（夏十五首・編二四）
Cなにとなく過ぎゆく夏のをしきかな花を見すてし春ならねども（夏十五首・編三四）
D秋の月霧のまがきにすみなれてかげなつかしきみ山辺のさと（秋二十首・編四五）
Eゆふぐれはさびしきものか夜もすがら月をながめてうちねなんほど（秋二十首・編四八）
F雪つもるあり明の月は風寒えてさざ波氷るしがのからさき（冬十五首・編六六）
Gおもふにもあはれなるべきとだちかなかたのの原のゆきくれの空（冬十五首・編六七）
Hけさみればみわの杉むらうづもれて雪の梢やしるしなるらん（冬十五首・編六八）
Iまちわぶるさ夜のね覚の床にさへなほうらめしきかねのおとかな（恋十首・編八三）
J山ざとの柴のあみ戸に影もりてほのかにかすむ春のよの月（山家五首・編八九）
K物ごとにさびしきやどのすまひかなまがきになるるみねのしら雲（山家五首・編九二）
Lしら山の杜のこかげにかくろへてやすらにすめるらいのとりかな（鳥五首・編九八）
M万代のすゑもはるかに見ゆるかなみもすそ川の春の明ぼの（祝五首・編九九）
Nみかさ山みねの小松にしるきかな千とせの秋のすゑもはるかに（祝五首・編一〇一）

それぞれの当代歌人詠（編纂本）

A吉野やま嶺の桜のさかりこそ雲路につづくながめなりけれ（春・一五一七・範光）
Bまつ里を分きてやもらすほととぎすうの花かげのしのびねのこゑ（夏・二二五・式子内親王）
Cいまはとて有明の影の槙の戸にさすがにをしきみな月の空（夏・一三三八・定家）

D物ごとに秋のあはれものこるなり霧の籬にすめる夜の月（秋・一六四八・寂蓮）
E夜もすがら月をながむるうたたねの心のうちをしる人もがな（秋・二〇五五・小侍従）
Fしろたへの雪に梢はうづもれてうら緑なる松のむら立（冬・一八六四・静空）
Gあはれなるかりばのをのの鳥だちかな思へばこれやつみの通路（冬・六七〇・慈円）
Hふる雪に三輪の山もとうづもれてたのめし杉は木ずゑばかりぞ（冬・九六五・季経）
Iありしよを見はてぬ夢の枕にも猶うらめしきかねのおとかな（恋・五八三・通親）
J入日さす柴のあみ戸に影もりて枕になるる峰のしら雲（山家・七八九・忠良）
K物ごとに秋のあはれものこるなり霧の籬にすめる夜の月（秋・一六四八・寂蓮）
Lあはれなりこしのしらねにすむ鳥も松をたのみて世をすぐすらん（鳥・一四九八・家隆）
M万代の末はるかなるけしきかなはこやの山の春の明ぼの（祝・一六九九・寂蓮）
N君が代は春のみやまの嶺つづきおひそふ松のすゑもはるかに（祝・一五〇〇・静空）

Ⅱ　後度百首内における当代歌人詠をふまえたと考えられる院詠歌

a梅がかはながむる袖にかをりきてたえだえかすむ春の夜の月（霞・五）
bいかにいひいかにかすべき山のはにいざよふ月のゆふぐれの雲（月・三一）
c秋の時雨ときはの山はそめかねて嵐にぞかるよその紅葉を（紅葉・三八）
dさびしさに煙たえせぬ賤のいほとへかし人の雪の下をれ（冬・雪・四五）
e三日月のほのめく暮の山のははながめばかりも有明の空（暮・六六）

25・文学研究科／瀧倉朋世【縦組】.smd Page 20

f 月きよきあかしのせとの浪の上にうらみを残すありあけの雲（海辺・七七）
g 春はただ軒端の花をながめつつ家路わするる雲の上かな（禁中・八一）
h うすみどりまだ夏あさき木の間よりはるをとどむる藤つぼの藤（禁中・八二）
i としの暮三世の仏の御名を聞きて心はれ行く雲の通ひぢ（公事・九五）
j むしろ田やかねてちとせのしるきかないつぬき川に鶴あそぶなり（祝言・一〇〇）

それぞれの当代歌人詠（初度百首（編纂本）内）

a 梅の花匂ひをうつす袖のうへに軒もる月の影ぞあらそふ（春・一三〇九・定家）
b 秋といへば物をぞおもふ山のはにいざよふ雲のゆふぐれの空（秋・二四六・式子内親王）
b やすらはでねなんものかは山のはにいざよふ月を花にまちつつ（春・四二〇・良経）
b いかにいひいかにおもはんみよしのの花はかすみにあけぼのの空（春・六一五・慈円）
c 我が恋は松を時雨の染めかねてまくずが原に風さわぐなり（恋・六七五・慈円）
d あと絶えてしられぬほどの山路かはとへかし人のなさけばかりに（山家・九九二・季経）
e 三日月のほのめく空にみゆるかなあはれをそへん行すゑの影（秋・七四二・忠良）
f いかにせんあまの川風身にしみて恨をのこす明くれの空（秋・二〇四一・小侍従）
g ながめつるけふはむかしになりぬとも軒ばの梅はわれをわすれな（春・二一一・式子内親王）
h さくら色の衣にも又わかるるにはるをのこせるやどの藤かな（夏・二二四・式子内親王）
i ゆきの中に仏の御名をとなふればきく人もみなつみぞ消えぬる（冬・一一七二・俊成）

j むしろ田のいつぬき川のしきなみにむれゐる鶴のよろづ代の声（鳥・四九八・良経）

おわりに

初度百首をめぐり、後鳥羽院の定家受容を述べてきた。初度百首で院が本歌取り、もしくは参考とし詠歌した和歌は、『古今集』から『新古今集』で三〇首見受けられた。一章では、その内、定家詠もふまえたと考えられる和歌（勅撰集は七首）について検討した。そこでは、のちに定家のように和歌を詠むことの危険性を唱えながらも、定家詠を取り入れ詠歌をしていることが窺えた。院は、初度百首の時から、古今和歌をふまえて詠歌していて、『古今集』を心得ていたことがわかる。百首中、十二首、古今和歌を参考にしたことや、古今和歌のうち六首が、「よみ人しらず」と詠歌時期が古い和歌からで、定家の本歌取りの手法と共通している点がみられる。二章では、その他の勅撰集のそれぞれの和歌においても、巧みな定家詠の影響がみられた。三章では、一、二章にあげた以外の院詠歌五首について検討した。h歌は、院は散る桜の花びらの様子を雲げの風に見立てて詠み、定家は、水上で散った花びらがまじり、泡立つ滝を詠んでいる。「にほひをそふ」を吉野山の桜に使った例は他に見えないので、定家詠の影響が大きい。i歌は定家詠の海の眺望を詠み「入日を受け止める山の端もない」としたところを「月を眺めると苫屋からは山の端も見えない」と詠みかえている。j歌は「荻の葉末を風が吹きこして行く秋の夕暮れ」を、「萩の末葉を吹きこす風も、秋が更けたのだなあと感じさせる」に詠みかえている。k歌は、「すがはらやふしみの里」を取り、「春の明ぼの」を「冬のあかつき」と詠みかえ、春の花の歌を初冬を告げる鐘の歌に詠みかえている。l歌は、「心心」を取って和歌を詠んでいる例は他にも

25・文学研究科／瀧倉朋世【縦組】.smd Page 22

みえるが、「これまでも」との組み合わせは、定家詠をふまえている。院は定家詠を取り入れながらも自身の工夫を加えて詠歌をしている。四章では、改作九首のうち、三首は定家詠に影響を受けていることを再確認し、御集におさめられている一五〇四、一五三六歌にも初度百首（定家）の影響のある和歌を院は詠んでいることについて述べた。五章では、改作ではないが、院は、初度百首で詠んだ一四首は同じ初度百首の他の歌人の和歌を参考に詠んでいた。また、参考とした歌の部立ては、一首を除くと同部立てであった。また、次の百首である、後度百首でも初度百首の和歌を参考に院は、一〇首詠んでいる。改作時の和歌は九首中、五首、後度百首詠は全て、参考歌とは別の部立ての和歌より摂取している。院は、初度百首から当代歌人詠を参考に詠んでいる。院は、詠歌活動を始めた初期の頃から、当代歌人、特に定家の影響を受けてきたと考えられる。

院は定家の才能を認め、時には否定していたが、終生意識させられ続けた人物であった。そういう定家の営為に対して、院は、危機感を持ちながら、初期の頃からその気持ちがあった。院にとって、初度百首は特別で、定家詠を参考に何度も詠歌をしていた。

注

(1) 樋口芳麻呂氏「隠岐配流の時代」『後鳥羽院』王朝の歌人10（集英社・一九八五年）（以下、樋口氏論の引用は全てこの著書による）は次のように述べられている。

『後鳥羽院御口伝』は、院が初心者のために、作歌のこころえや近代歌人の作風についての批評・感想を率直に書き記したもので、院の歌観を端的にうかがわせる点、注目すべき歌論書である。（中略）

この書の中で、院は、初心者が詠歌のために心がけるべきこととして、

一、学問の必要、『万葉集』『古今和歌集』を詠みこころえておくべきこと。

一、百首は幾度も詠むべきこと。（中略）

の至要七か条をあげ、次に、歌の姿が人間の顔のように一様でないことを、近代のすぐれた歌人、すなわち、源経信、俊頼に始まり、釈阿（俊成）・西行以下定家におよぶ十五名についての率直卓抜な批評を通してあきらかにしている。

(2) 寺島恒世氏「終章　後鳥羽院における和歌　第四節　後鳥羽院の和歌　五　定家との関わり」（『後鳥羽院和歌論』笠間書院・二〇一五年）は次のように述べられている。

そうした〈場〉を構成していた多くの廷臣のうち、終生意識させられ続けた人物は定家であった。彼からの強い影響を受けて始めた和歌の営みを自ら強く推し進めていく中で、後鳥羽院が不安を覚えさせられ、それが次第に募らされるのは、定家の和歌が〈場〉に関わらぬところで成立することであった。（中略）定家の歌は優れた達成を遂げるために、もっぱら言葉に徹することを方法とする。

それは、『後鳥羽院御口伝』で認定する通り、天賦の才能を前提とした修練の賜物であって、通常の歌人が会得できる質の創造ではない。

(3) 院の初度百首内での勅撰集の和歌より摂取、もしくは表現を参考とし詠んだと考えられる和歌を出典別に整理すると、『古今集』十二首、『後撰集』二首、『拾遺集』六首、『後拾遺集』六首、『金葉集』二首、『詞花集』一首、『千載集』〇首、『新古今集』一首となった。なお、「あさくらやきのまろどのにすむ月の光は名のるここちこそすれ」（四〇）は、『新古今集』入集歌「あさくらやきのまろどのに我がをれば名のりをしつつ行くは誰が子ぞ」（巻十七・雑歌中・一六八九・題しらず・天智天皇御歌）を本歌に、詠んでいる。勅撰集で「あさくら」「木の丸殿」は『後拾遺集』（一〇八一～一〇八三歌）から始まり、歌論書では『俊頼髄脳』にみえ、そこで詠者は天智天皇としている。一六八九歌の撰者名注記に、定家の名があり、定家が評価した名歌である。

また、本説の和歌は、出典が『源氏物語』は四首、『伊勢物語』は二首であった。

(4) 『源氏物語』の本文は『日本古典文学全集　源氏物語』一～六（小学館・一九七二年）による。

(5) 久保田淳氏（『藤原定家全歌集』上・下　筑摩書房、二〇一七年）を参照した。

25・文学研究科／瀧倉朋世【縦組】.smd Page 24

(6)『初学百首』、定家二〇歳の時の作であり、初の百首歌である『初学百首』（養和元年四月）は、父である俊成の影響も指摘されてきた。本百首歌については、若年ながらも「完成された歌風」を示すなどの評もなされ、定家の非凡さを窺わせる作品として評価は高い。

(7)近藤氏「「滝の白糸」が匂うという表現が視覚的印象になじまない」、山根氏「……美しい世界ではある。」、菱川氏「匂いの中にすべてをつつみこんでいこうとする新しい美への出発を示す萌芽をやはり僕は感じる。定家の夢幻性への……。」と述べられている。（近藤潤一氏・千葉宣一氏・菱川善夫氏・山根対助氏『初学百首』P五八（桜楓社、一九七八年））

(8)有吉保氏、『新古今和歌集の研究　基盤と構成』（三省堂・一九六八年）

(9)久保田淳氏、『新古今歌人の研究』（東京大学出版会・一九七三年）

(10)寺島恒世氏、「『正治二年初度百首』考―後鳥羽院の百首歌について―」（『国文学言語と文芸』八一号、一九七五年）

(11)萬田康子氏、「後鳥羽院「正治初度百首」をめぐって」（『語文』第四十九輯、一九七九年）

(12)山崎桂子氏、『正治初度百首の研究』（勉誠社　二〇〇〇年）以下、山崎氏論の引用は全てこの著書による。

(13)改作時期について、山崎氏は「編纂本と御集本を改作という観点から比較すると、一首がそのまま他の歌と差し替えられたもの、部立内で歌の配列が変えられたもの、歌句が修正されたもの、がある。例えば、

　ねのびするけふかすが野に雪ふれば松に花さく心ちこそすれ（春二十首・編三）

がないのは、稲田氏の論によって定家・家隆の類成句表現を排斥する影響」と述べられている。

(14)樋口氏（注(1)）前掲本の「第二章　詠歌精進の時代」）は「院が詠歌にきわめて熱心で、しかも果断で、意に満たなくなった歌は、新作歌とただちに入れ替えてはばからないことを物語っている。」と述べられている。寺島氏（（注(2)）前掲本の「第一章　百首歌の主催　第一節　正治両度百首」）は、「旺盛な意欲からすれば、改作は一時期に行われたと見るよりも、随時になされ続けたと見るほうが自然である。」と述べられている。はっきりしないながら『正治後度百首』の詠作法をみると、それまでには改作されたと一応考えておく。

御集本は一〇〇首だが、編纂本は一〇三首あり、編纂本になく、御集本にみえる和歌は九首（御一〇、一一、一五、二一、二五、二九、三一　四五　五九）であり、御集本になく、編纂本に見える和歌は一二首（編三、一一、一六、二一、二五、二九、三〇、（四五）五六、五八、五九、六三）がある。（編纂本と御集本との区別のため、「御」「編」と和歌番号の前に私に付す。）編纂本で重複している和歌は、編四五と編九一があり、編纂本では重出したまま、御集本はそれを改め、（同和歌を、御八八）に一度みえる。

(15)御集の和歌一七六八首中の全てにおいて、定家取りしたと考えられる定家の詠歌は四十二首ある。そのうち、初度百首で詠まれた定家詠は九首、それらを参考に院が詠んだと考えられる和歌は一一首あり、院が初度百首で詠んだ和歌は四首（御五二含む）ある。

(16)『和歌童蒙抄』第五は結句を「ヲモヒソメテキ」とする。『拾遺集』のよみと同じ。

(17)山崎氏は、前掲論文で、本論文でのn歌（「風は吹くと……」）、o歌（「軒ちかく……」）にあたる歌について、「両歌は編纂本にはないのである。ここから定家詠を見た院がその影響下に詠んだ歌を御集中の百首への改作にあたって入れたのだという推測が出来そうなのだが、実は編纂本・御集双方にある歌についても定家の本百首詠との類似が認められる」と述べられている。

(18)例えば次の二首p歌、q歌は、経家詠、良経詠の当代歌人詠を参考に院が改作したと考えられる。（注(2)）に掲げた、寺島氏論文参照。

　夏十五首

　p夏くれば心さへにやかはるらむ花にうらみし風もまたれて（御二一）

　qうたたねの夢ぢのすゑは夏のあした残るともなきかやり火の跡（御三一）

同じ初度百首の中での改作、特に良経は定家とも関係が近い。

　p歌は、夏十五首の最初に配され、夏がくると、衣だけでなく心までも変わるのだろうか。風を待つ心をいぶかる様子を詠んでいる。次の古今和歌、経家詠（夏十五首の最初の詠）、

　　うつろへる花を見てよめる　　みつね

　花見れば心さへにぞうつりけるいろにはいでじ人もこそしれ（『古今集』・巻二・春歌下・一〇四）

　夏

25・文学研究科／瀧倉朋世【縦組】.smd Page 26

心さへころもとともにかはればやいとひし風を今朝はまつらん　（正治二年八月御百首・編纂本・経家・一〇二四）

を踏まえた歌である。古今和歌の歌意は「花を見ると心まで移ろってしまうものだ。顔色には出すまい、あの人に知られるといけないから」、経家は「心までも衣がえとともに変わったので、春には厭わしく思った風が今朝は待ち遠しく思われるのだろうか」である。院は古今和歌の「花見れば」を「夏くれば」にし、「心さへ」を取っている。また、院は経家詠より「かはればや」、変わりたいを「かはるらむ」とし、「いとひし風」を「うらみし風」に、「まつらん」を「またれて」といいかえている。

q歌は「うたたねの夢から覚めると蚊やり火の跡が見えるという、夢、現実いずれもはかない夏の朝」を詠み、次の良経詠、

冬

明がたの枕のうへに冬はきてのこるともなき秋のともし火（正治二年八月御百首・四五九）

をふまえている。院は「のこるともなき」「火」を取っている。院は良経を評して、『後鳥羽院御口伝』で平凡な歌がなく、全ての歌の質が高いこと、品があることなどをその特徴として称賛している。

（たきくら　ともよ／本学大学院生）

25・文学研究科／瀧倉朋世【縦組】.smd Page 28